

ハイドン：オラトリオ《四季》

ヨーゼフ・ハイドンのオラトリオ《四季》は、1801年に初演された、自身のキャリアにおける集大成とも目される大作。

「オラトリオ」とは、独唱、合唱、管弦楽によって構成される、物語性のある大規模な作品。「オペラ」との顕著な違いは「上演形態」と「主題」の2点。まず上演形態だが、オペラが衣装、舞台装置、演技を伴う「演劇」に近いのに対し、オラトリオはそれらを用いない「演奏会形式」で上演される。次に主題に関して、オペラの物語（題材）は多岐にわたるが、オラトリオは宗教音楽から発展したため、聖書あるいは道徳的・叙事的な内容にもとづくことが多い。

ハイドンは1790年代のイギリス訪問の際、ヘンデルのオラトリオに深い感銘を受け、オラトリオの作曲を志すようになった。その最初の成果が《天地創造》（1798年）として結実し、ヨーロッパ中で成功を収めた。これに気を良くした（《天地創造》と同じ）台本作家のゴットフリート・ファン・スヴィーテン男爵は、すぐさま次のオラトリオの企画をハイドンに持ち込んだ。それが《四季》である（《四季》の原作は、イギリスの詩人ジェームズ・トムソンの長大な叙事詩『四季』（The Seasons）で、スヴィーテン男爵がこれをドイツ語に翻訳・翻案し、台本を作成した。ちなみに、台本の内容をめぐって、ハイドンと男爵のあいだには確執が生じたという）。作曲は1798年に着手され、1801年に完成し、同年4月、ハイドン自身の指揮により初演された。オーケストラと合唱を合わせると総勢180人以上を擁する大布陣となった。

さて、《天地創造》や従来のオラトリオと異なる《四季》の大きな特徴に「世俗的な日常」が描かれている点が挙げられる。《四季》は、一年を通じた自然の移ろいと、その中で働く素朴な農民たちの生活を、愛情豊かに表現しており、登場人物も（聖書の人物ではなく）農夫シモン（バス）、その娘ハンネ（ソプラノ）、ハンネの恋人で若い農夫ルーカス（テノール）という、名もなき「普通の人々」である。

全体は〈春〉〈夏〉〈秋〉〈冬〉の4部から構成され、演奏時間は2時間をゆうに超える。ハイドンは健康状態が優れない中、自身の技量のすべてを本作に傾注し、《天地創造》でも活用した「トーン・ペインティング（tone painting）」の技法を要所で用いた。まず冒頭の〈春〉では、冬の終わりを告げる序奏から、雪解け、若者の喜び、農夫の種まきの情景が描かれ、最後は自然の再生と神への感謝を歌う壮大な合唱で締めくくる。続く〈夏〉では、日の出の光景、うだるような暑さが描写されるが、何と言っても圧巻は激しい雷雨の場面。オーケストラがフル稼働し、ティンパニが轟音を立てるここでの表現は、ベートーヴェンの《田園》にも影響を与えたと言われている。〈秋〉では、収穫の喜びと「狩りの場面」が聴きどころ。ホルンが勇壮に鳴り響き、犬が獲物を追う様子が生き生きと表現される。そして最後は、収穫祭の酒宴で陽気に盛り上がる。〈冬〉に至ると楽想が一変し、陰鬱な寒さを感じさせる内向的な序奏で始まる。人々は暖炉を囲み、ハンネが素朴な「糸車の歌」を歌う。ここで重要なのは、ハイドンの脳裏にあった「冬」が、単なる四季の終わりではなく、「人生の冬」、つまり「死」へのイメージにオーバーラップしていた点だ。それを裏付けるかのように〈冬〉の終盤（第38曲）で、人生の終焉と来世への希望を込めたアリアをシモンが歌い上げ、作品全体に思弁的な深みを与えていている。